

『賀茂保憲女集』四季序の位相

— 同時代仮名散文との接点から見る —

久保木 寿子

一、問題の所在

『賀茂保憲女集』は、『私家集大成 中古1』（昭和四八・一）に流布本（書陵部蔵「六女歌集」所収）と異本（宮内庁書陵部蔵「賀茂女集」）の翻刻を見ることができ、『新編国歌大観 第三巻』（昭和六十・五）にも稲賀敬二氏による流布本（榊原本）の校訂本文があるので、その意味では手近かな作品ではある。また、近年武田早苗氏^①の校注による和歌文学大系20『賀茂保憲女集』（書陵部蔵「六女歌集」所収本を底本とする）が刊行され全体像がより見えやすくなった。とは言え、未だ本文にも確定しにくいところも多い。総歌数二百首ほどの小歌集ゆえ与しやすく見えるにもかかわらず、総序・四季序・恋序・結びの序（雑序）が紡ぐ長大な散文の解説を含め、問題の多い歌集であることに変わりはない。

長大な四つの序は、我が身を基点に社会的階層の発生にまで

言い及ぶような特異性を見せつつ、和歌の表現世界を越えて賀茂氏の女としての強烈な自恃の意識と閉塞感を鮮明に叙述する。それ故、『土佐日記』を嚆矢とする同時代仮名日記との主眼的・文体的な位相の見定めが必要となるが、前記本文の問題もあり未だ手つかずの状態に近い。

先に稿者は、初期定数歌の伝播に関わった場として河原院を位置づけ、ここに集った一群の歌人の系列に属するものとして、賀茂保憲女とその歌集にも言及したことがあった。その後徐々に、その類纂的な編成から勅撰集的な歌集として把握されていた従来の見解^②から、初期定数歌の系列の中で捉えることが一般化してきた^③と言っているであろう。その中で稿者も、「総序」および四季歌を中心に、当集に見られる特異な「曆的観念」について検討し、それが初期定数歌全体を様々に規定する要素に通底するものであることについて、概略、以下のようなことを述べてきた^④。

1、当歌集の和歌および和歌を敷衍して成る長大な散文の序中に、「易経」の直接的引用が見られること。そこには、特徴的な曆的観念があり、それはたとえ祖父の曆博士賀茂保憲の著『曆林』（散逸）の跡を窺わせる賀茂在方『曆林問答集』（応永二一年成立）に拠って傍証される種類のものであること。これらのことは曆の家「賀茂氏なる女」（結びの序）としての矜持が採らせた方法とみなされること。

2、同時に、好忠定数歌序に通底する白詩の受容が見られ、

それは閉塞状況にある女の訴嘆と矜持を示す主題の形成に影響していること。本歌集を特徴づける「鳥」「魚」などの表象は、白詩の基盤にある「生生の理」（周易・繫辞上）即ち万物が生命の充足を果たすこと、への希求に発するものであると考えられること。

3、抑も、初期定数歌そのものが、曆的觀念と無縁ではなかったこと。即ち好忠百首が、四季・恋で前半を組み立て、残りの半数を十干・一日めぐり・一夜めぐり・各方位の物名歌でまとめているなどは、六朝詩雑体の建除詩・六甲詩の形式に依るもので、それは後の好忠三百六十首和歌（毎月集）への展開と無理なく結びつくこと、等々。

さて本稿では改めて保憲女集の歌序の中、時系列に沿う構造を持つ「四季序」を通して、その散文としての特質を考えたい。「四季序」は、正月一日にはじまり十二月晦日で終わる。立春に始まる自然曆的な節月意識に依るのではなく、曆月曆日意識に即した構成である。季の代表的な景物や年中行事を表す歌材が、曆的時間に即して配列構成されることにより、四季序にはまさに歳時記的な△類聚性▽が生じている。古今集の歌材を遙かに越える多様な歌材には、初期定数歌の応和が重ねられる中で定着を見た生活密着型の歌材も多い。これを歌材提示型の△類聚性▽と言っておこう。だが、ここで問題としたいのは、歌材よりも歌材を連ねる散文の叙述の方である。四季序には、枕草子の△随想性▽には及びもつかないものの、確かに単なる

△類聚性▽を越えた△随想性▽への萌芽がある。総序・恋序が日記的感情表白的散文に傾くのは、やや異質なものである。これを当代の文学状況の中に置こうとすれば、まずは仮名日記、そして次には『枕草子』が自ずと問題になってこよう。

因みに当歌集の成立は、父の曆博士賀茂保憲（延喜十七年917〜貞元二年977）の生年と女の疱瘡罹患年次を手懸かりに、①正暦四（993）年冬から翌春以降とする説と、②長徳四（998）年頃とする説が並立している。勿論、『土佐日記』（承平五年935成立）、『蜻蛉日記』（貞元二年977頃成立）よりは後になるが、『枕草子』との先後はきわめて微妙である。①説につけば、清少納言の初宮仕えの時期とほぼ重なる時期で、保憲女集が先行する。②説の場合は、清少納言が礎稿を「かき集め」た「つれづれなる里居」（『枕草子』跋文）が、長徳二（996）年三月から閏七月にかけてのことなのでこれに遅れることになる。但し、『枕草子』の書き継ぎ、流布の問題も絡むので両者の関係は確定しがたい。本稿では、成立の先後を決定しその影響関係を云々しようとする訳ではないが、①説に立った場合の仮説として論を先に進めたい。『土佐日記』・『蜻蛉日記』より後、『枕草子』とはほぼ同時期にあつて、賀茂保憲女の△四季序▽は、散文としてどのような位置を占めるのであろうか。（本文は、武田氏校訂『賀茂保憲女集』に拠る。但し、私に訂したところがある。以下『保憲女集』と略す。欠脱部分は私家集大成所収『賀茂女集』で補う。『土佐日記』（新編日本古典文学全集）、『蜻蛉日記』（新編日本古典文学全集）、

『枕草子』（日本古典全書—三巻本）、和歌は基本的に『新編国歌大観』に拠る。但し私に漢字を宛てた。

二、四季序の文体——『土佐日記』の受容——

本来「歌序」は、公宴あるいは権門の私宴や歌会などの場で制作されるものであるが、敢えてそれを私的な定数歌（好忠百首を嚆矢とする初期定数歌は、私的な営みとして出発した）に持ち込んだ好忠百首序の意義については、かつて述べた^⑦。「自らの場」における申文の内容の序は、基本的に『保憲女集』（特に「総序」）にも踏襲される。しかし、その文体について言えば、好忠百首序・三百六十首歌の序が五七の音数律にこだわる（好忠四季序は長歌の形を取る）のに対し、対偶表現を基調とする散文として展開する。

具体的に見ていこう。武田氏校注は、四季序をその内容から次の十二の部分（注14〜25）に分けて説明する。

春①14 「正月の祝賀の様子を中心にした、めでた尽くしの部分」

②15 「色つくし」 ③16 「内裏、正月風景」

④17 「一般人の正月風景」

⑤18 「人間以外の生き物が自然を素直に受け入れている様を描く」

夏⑥19 「庶民生活に密着した叙述が多い」

秋⑦20 「七夕からの連想か、恋愛に関する語、表現が多い」

⑧21 「男女の出会いから描き、女が心を許した後、逢瀬、破局へと続く」

冬⑨22 「このあたりから冬の部。夏の冒頭で火桶を片づけたのに対し、炭を熾している」

⑩23 「閉塞的な季節、冬の憂鬱な心情が吐露される」

⑪24 「狡猾な人間と、動物の純粹無垢な様を対比的に描く」

結⑫25 「人間の傍若無人さと身勝手さを記しつつ、四季の序を纏める」

便宜これに沿って進める。但し、私見では⑦20には、一部衍文があると思われる。「天にたとふる七夕の、契れる月日待ちて、忍びの妻をもとらずして年経れば」から「七夕はゆゆしとぞ言ふめる」と続くべき所に、「恋序」の一部が紛れ込んでいる可能性がある（詳細は別稿参照^⑧）。従って問題の部分はここの考察の対象にはしていない。

【対偶表現】

「かく時につけて憎からぬ世中」（⑪）を記した四季序は、「総序」に色濃い述懐性とは無縁に、先ず聖代の言祝ぎに始まる。

①「14」万世照らす日の本の国、言霊を保つにかなへり。動きなき奈良の都の東には、万世のかけ見ゆる鏡の山さやか
にすめり。千歳ふる鈴鹿の関より、越ゆる年の一日よりは、海人のたく繩繰り返し、千尋の伊勢の海をうたふ。
西は限りなき我君の御代に住吉の浜、世々に枯れせぬ松

生ひたり。憂きことはみな忘れ草茂れり。……春の方の東琴をくれだし声に調べ、梅が枝に来ある鶯などかきならして、万歳楽など吹き遊ぶ。

神威を身に負う王の、東西に渡る空間支配と、新たな時(暦)の支配の始まりが言祝がれ、東西の地名が対照的に織り込まれ頌えられる。これは、続く恋序に「人はみな同じゆかりなり、されば高き賤しきなぞは鳥にこそあれ、いづれか高き賤しきあらむ、同じ類にこそあらめとて」という本集の白眉とも言うべき一節を補完して、「昔、高き賤しきなく、西東無う……」と「西東」の語を用いた王権支配以前の原初への言及があることを併せ考えれば、極めて明瞭に今の自身の階層上の立ち位置を見定めた上での記述であると思われる。一々指摘するまでもなく対遇表現は随所に見られる。

掛詞を縦横に駆使して紡ぎ出される地名の多くは、神祇歌謡・催馬楽由来のもの。

なお本文「ならのみやこ」は不審(異本「たひらのさと」)。「動きなき」を冠して詠われる「岩倉山」が、鏡山との位置関係からしても穏当ではある。恋序「ならの宮このふること」に照らししても、当代を言祝ぐこはやはり「いはくらやま」の誤写かと疑われる。因みに『拾遺集』神祇に「安和元年大嘗会風俗」の歌として「鏡山」とともに「岩倉山」が詠まれ、次の歌が入集する(能宣集に類歌がある)。

動きなき岩倉山に君が代を運びおきつつ千代をこそつめ

『拾遺集』における神楽歌の分類採取、あるいは記名の風俗歌・個人的な社頭歌などの出現にみるように、神祇歌謡歌はこの時期、対象化され文芸化される時期を迎えつつあった。早く蔵中スミ氏が指摘されたように、好忠和歌の土俗性なるものも、多く神楽歌・催馬楽等の意識的な撰取に負うものであった。保憲女は、序文冒頭にこれを取り込みつつ、先ずは四季序の一步を踏み出している。

【韜晦・諧謔性】

四季序に限らず保憲女集は、韜晦・諧謔に満ちている。以下に示すように保憲女は、このような文体を『土佐日記』に倣う事で獲得したと思われる。

②「15」……昔の衣青やかなるに、黒木の橋渡しし、白妙の鶯おりあて、のどかなるに、茜さす日の色衣、深きも浅きも着たる人参り集まりて……

校注が「色尽くし」と言う用語で括る部分。ここに五色ならぬ四色を揃えたのは、『土佐日記』二月一日条の「(と)ころの名は黒く、松の色は青く、磯の浪は雪のごとくに、貝の色は蘇芳に」五色にいま一色ぞ足らぬ」を意識してのことであろうか。元より五色は、五行の黄青黒白赤を指す。「黒木に白鷺」のような色彩の対比の妙は、舵取りが発した「黒鳥のもとに白き波を寄す」に対し「何とにはなけれども、ものいふやうにぞ聞こえたる」と評した『土佐日記』の関心に倣うもの。

③「16」内裏には長筵敷きて、長裳着たる人ぞより来て、頭白

き翁、女、齒がためおぼしきことをいひとゞめて、鮎の口をうつくしき、影も浮かばぬ餅の鏡として、遙けさ行く先を見て、神も許さぬ幸ひを、ほしきに從ひてあづかり、人も許さぬ言の葉を、心のまゝに楽しむ。

『土佐日記』元日条の影響は明らかである。「元日。……芋莖、荒布も、齒固めもなし。かうやうの物なき国なり。求めしもおかず。ただ、押鮎の口のみぞ吸ふ」と、貫之が遙かに思いを馳せたはずの都の元日の様が、典型的に示される。この類似は、題材とする元日の風俗描写に伴って表現が偶合したというのではない。例えば「齒固めのいはひして、もちる鏡をさへとりよせて」（『源氏物語』初音）のような平板な描写でもすまされるものが、「押鮎」をとりあげるのは当然としても、その「口をうつくしき」は、明らかに『土佐日記』の「口をのみぞ吸ふ」の諧謔に倣ったもの。「影も浮かばぬ餅の鏡」等の皮肉な物言いも、「船路なれど馬のはなむけす」などと同工の言語矛盾を衝くものである。序の文体は、明らかに『土佐日記』の影響下にある。

⑤「18」（異本から補入）

鶴は脛を隠して水袴着たりと思へり。海人は暖けき日を、衣得たりと思へり……かほ鳥心のままに遊ぶ。水を鏡にしたれど、何かは恥づかしきことのあらむ。

これも、葦陰で「心にもあらぬ脛にあげて見せける」の逆をいくもので、『土佐日記』を彷彿とさせることで一層の表現効果

を狙ったものと思しい。

なお、保憲女集37歌の三句以下は、異本文「祈りくるかさまの神や衣かけむころも」により、初めて意味が解かる。

37 白妙に咲ける卯花いりちとて風の神川衣かけしも

この歌は、『土佐日記』二月五日の条の、次の歌の用語を踏まえたものと思われる。

祈りくる風間と思ふをあやなくもかもめさへだに波と見ゆらん

『土佐日記』の諸注は、「かさま」を「風の止み間」と取るものが多いが、本来これは「笠間の神」（茨城県笠間稲荷）との懸詞を意識して詠まれたものであろう。「祈りくるかさま」という歌句は、他に検索されない。当序が『土佐日記』を直接享受したことの傍証となろうか。なお『実方集』五四に「宮のべのれうに：」という詞書で「あめにます笠間の神のなかりせばふりにしなかをなにしたのままし」の一首がある。「宮のべ」は宮口羊祭。その祭文に「掛畏支宮口羊五柱笠間ノ広前ニ：」（『拾芥抄』上本「世間不静時」とある。

【逆倒的視野とその展開】

以上のような個別の類似表現以上に注目されるのが、保憲女の視角・視座の問題である。ここでは『土佐日記』二月十一日条の次の部分との関連から、見ていきたい。

ある人、この柳の影の、川の底に映れるを見て、よめる歌、さざれ波寄するあやをば青柳の影の糸して織るかぞ見

る

青柳を糸と見、その水影に注目する表現は、「水のあやのみだるる池に青柳の糸のかげさへ底にみえつつ」（貫之集五〇二）の歌にも見られ、「青柳の影の糸」「青柳の糸の影」は貫之の歌ことばであることが判る。保憲女集の次の歌は明らかにこの影響下にある。

22 青柳の糸にや魚はかかるらん下ろせる影の網に似たれば
これは、季を春から冬にスライドさせ、氷の「網」に閉じられた魚を詠う次の歌と同じ趣向によるものである。

125 山川のいさからほり（異本「いほこほり」）の閉ぢたるは風こそ網と吹き結びけれ

このように辿れば、四季序の次の文の拠つて来たところは自明であろう。

⑩「24」氷にとぢらるる魚は、冬を結べる網とおもへり。水脈に在る網のほどにおいて…

『土佐日記』一月一七日の記に見られる賈島の詩、「棹は穿つ波の上の月を、船は庄ふ海のうちの空を」から、「水底の月の上より漕ぐ舟の…」「かげ見れば波の底なるひさかたの…」の和歌へと展開するいわゆる「逆倒的視野」による表現、その方法そのものの意識的導入である。これは四季序⑥「19」「水に宿れる影を魚は怖づ」の一節などにも通じるであろう。さらに、

121 冬さむみこほる池みづゆく雁の影とぢら（異本「こほる池みづゆく雁の影とぢら」）
めよひときるふへに（異本「く」）

172 水も無き空に網はるささがにのかかれる虫を魚と見るらむ

このような歌が散見される事実からして、これは単なる趣向の問題ではなく、保憲女の自照の方法として摂取されているのではないかと思われる。

172 が、『古今集』春下に「亭子院歌合歌」として入る貫之の代表歌「さくら花ちりぬる風のなごりには水無き空に浪ぞたちける」を踏むことは言うまでもない。が、その眼目は、貫之が求めたような逆倒した美的な幻影にあるのではない。その方法を踏襲しながら、保憲女の関心は、閉ざされた雁（の影）や網に掛かる（魚と見える）虫、月光の鈎に掛かる魚、即ち我が身の救いのない閉塞状況の比喩的形象に向けられているのである。

保憲女集の主題的景物である鳥（虫）と魚の表象が、『周易』「繫辞下伝」に拠ることについては、「総序」の次の部分を例に先にも論じた。

（保憲女集総序）ちはやぶる神代より、人を「ば」賢しきものにしけるぞ。空を飛ぶ鳥といへども、水に遊ぶ魚といへども、針をまうけ糸をすげて、そのまなこを閉ぢて、深き海と言へど、木を窪め、楫をまうけて、おのづから渡りぬ。

（『周易』「繫辞下伝」）古者包犧氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、觀鳥獸之文與地之宜、近取諸身、遠取諸

物。於是始作八卦、以通神明之德、以類萬物之情。作結繩而為罔罟、以佃以漁、蓋取諸離。…神農氏：黃帝堯舜垂衣裳而天下治、蓋取諸乾坤。剡木為舟、剡木為楫、舟楫之利、以濟不通、致遠以利天下、蓋取諸渙。」

「罔罟」は、獸・魚を採る「網」、「離」は「離の卦」で「網」の目の中に物が入っているかたち」を示すという(岩波文庫『易経』下)。「保憲女集」に頻出する「網」は、ここに由来し、抑圧の表象として機能する。

『周易』よりする「鳥」「魚」そして「網」が、自身の閉塞状況のこの上ない喩的表象として、貫之の逆倒的視野の方法を通して、構成的に布置されたことになる。ここに貫之の耽美性への一種の批判を読みとることも不可能ではない。

さて、今西祐一郎氏は、『土佐日記』が、五十五日に及ぶ日記の日付を一日も欠かさず表記する事実から、これは「仮名を用いての真名具注暦日記の忠実な『なぞり』」であり、以降の女性による仮名日記との重要な違いであると指摘する。「をとこもすなる日記を、んなもしてみん」とはそういう「もじり」であり、この「なぞり」から生じる「もじり」は滑稽諧謔を生む。それがこの作品の企図するところだといっているのである。その享受層としては、自ずと「本来」の形を熟知する男性官人が想定されることになる。

このようにも性格付けられる『土佐日記』の方法を、さらに「なぞ」ることが、しかも「女」によって為される時、そこに

はより痛烈な、「もじり」としての本音が生じてくるのではなからうか。『土佐日記』を含めた「もじり」の重層を真に理解しようとするような誰を想定して、保憲女は歌集を編んだのであろうか。貫之歌集・『土佐日記』を集团的に享受したと思しい河原院の歌人たちと、それに連なる花山院周辺の人々がまたしても想起されるが、牽強に過ぎるであろうか。いずれにしても、「四季序」散文の文体形成の重要な契機として、『土佐日記』があることを押さえておきたい。

同時にまた、『土佐日記』が、十二月二十一日戌の時の土佐出達の記事からはじまり、翌二月十六日の帰京に終わるといふ実体験に即した体の時間構成を基本とするのに対し、「四季序」が、元日から晦日までの暦日的構成の枠組みを設定しながらも、体験を逐次綴るといふよりは多分に歳時記的觀念化を潜らせているという、両者の差異にも留意する必要があるだろう。

三、歳事へのまなざし——『蜻蛉日記』との位相差——

『保憲女集』の次の歌の左に「五月蟬の声、麦の秋を送る」とあるのは、典拠の注記が混入したものとされる。『千載佳句』に載る李嘉祐「夏興」の摘句で、『礼記』月令を踏むもの。

61 冬をへてともしにおふる麦の秋は夜寒なりけり蟬の羽衣

同じ麦秋を詠んだ当期の歌に道綱母歌集の次の歌がある。

送るといふ蟬の初声聞くよりぞ今かとをぎ(麦—歌合本文)

の秋を知りぬる

これは正暦四年993五月五日の東宮帯刀陣歌合「蟬」題の歌に一致する（他に四首が道綱母集所収）。従って『保憲女集』の成立にやや先行して詠まれたことになるが、ほぼ同時期に同一出典への関心が見られることに注目したい（因みに、道綱母歌が翻案に近いのに対し、保憲女の歌はここでも一種「逆倒的」な趣向・諧謔を見せる）。先頃、大谷雅夫氏が『蜻蛉日記』誕生の一契機として道綱母の漢語漢文学の知識発想の獲得があることを強調し、本文解説と合わせて興味深い論を展開された。当代一般の「教養的知識」に解消しない立論は注意してよい。

この道綱母が自らの半生を綴った『蜻蛉日記』は、上巻末から中・下巻へと進むほど、日時の記述が詳細になると指摘されている。中巻に至って土佐日記風の日録記事が見られ、就中、中巻後半、天禄元年秋頃から下巻初頭天禄三年八月までの間に、それが偏在する^⑩という。また具注暦へのメモ・仮名暦の使用といった外在的な条件が云々されるところでもある。加えて、当日記の構成について言えば、中・下巻は、主題に沿った記事の回想的選択が先ずあった上巻とは全く異なり、「三年」という期間の枠組みが先行し、明瞭な暦月意識により年頭・年末を区切る。執筆事情の変化によるとしても、上巻とは異なるこのような年単位の枠組みには、好忠毎月集などの影響も一考されていいであろうか。夙に『蜻蛉日記』下巻、天禄三年三月の記事中に見える「すずめがくれ」なる語について、好忠毎月

集からの引用が指摘され、『好忠集』の成立下限推定の根拠にも^⑪もされている。

『保憲女集』の年初年末を区切る四季序の枠組みも、その意味では『蜻蛉日記』中・下巻に通底する。ここでは「四季序」末尾、年末の記述について『蜻蛉日記』との位相差を見ておきたい。

⑩「24」水脈にいる網のほどにおいてかしょうしみかとにせられ
う持て歩くと騒ぎて、いつしかと親よにあひ見むと待て
ば、童べはとく鬼死なむと、心もとながりて、こゝかし
こ打ち鳴らして、いつしかとぞ語らふめる。

かく時につけて憎からぬ世中の、命も栄えも衰へず
は、何の悲しびかあらむ。」

傍線部が読めないが、後半部分は「門に節料」^{かどせちれう}であろう。また校訂本文は「とく鬼死なむ」と宛てるが、「とく鬼為なむ」（「早く鬼遣らいをしよう（と、じれったがって）」の意であろう。「追儼」のうちに暮れていく典型的年末風景である。

「四季序」のこの部分に対応する歌は流布本保憲女集にはなく、冬歌末尾には脱落が予想されている。以下に示す異本の独自歌（私に漢字を当てる）四首を補って考えるのが穏当とされる。異本128・129は、宮廷用の新年の「贅」を準備する人々が担う天秤棒「杵（あふご）」を歳末の景物として採り上げたもので、四季序の「節料持て歩くと騒ぎて」の記述に対応する。異本130は年末の鬼やらい（追儼）の歌である。

〔異本歌 127〕こほりては久しかりけり冬の雨のこきに玉なす

露の命の

〔異本歌 128〕贅人の持ち越す年の重き荷にあふごたりたり降

れる白雪

〔異本歌 129〕しら雪をかざしにし(底―)たる贅人のあふ

ごとともに暮る年かな

〔異本歌 130〕年ごとに人は遣らへど目に見えぬ心の鬼は行く

方もなし

初期待数歌が冬の末尾に追儼・魂祭などの年末晦日の行事を詠み込むことは殆ど無く、僅かに好忠毎月集に「魂まつる年(冬)の終りになりけり今日には又やあはむとすらん」(好忠集三六八)を見る程度である。これに対し『蜻蛉日記』は、中下巻の末尾をそれぞれ次のような「追儼」の記事で閉じている。下巻「御魂」は「魂祭」のこと。

中巻末尾「人は、童、大人ともいはず、『儼やらふ儼やらふ』

と騒ぎののしるを……年の終はりにはなにごとにつ

けても、思ひ残さざりけむかし。」(天禄二年末)

下巻末尾「思へば、かうながらへ、今日になりけるもあさ

ましよう、御魂など見るにも、例の尽きせぬことにお

ぼほれてぞはてにける。京のはてなれば、夜いたう

更けてぞたきたき来なる(とぞ本に)」(天延二年末)

いずれも、晦日の行事に重ねて実人生の哀感が滲む叙述になっている。

『蜻蛉日記』上巻にも、晦日の「儼」に軽く触れ、「あふご」を話題にする元旦の記事がある。安和元年元旦、貞観殿尚侍登子との贈答場面の記事である。興趣の中心は恋歌仕立ての和歌の贈答にある。『古今集』誹諧歌「人こふる事をおもにと担ひ持てあふこなきこそわびしかりけれ」を踏まえるが、古今歌自体、「逢ふ期」「枅」を掛けた恋の戯れ歌で、行事そのものとは関わらない。この場合は、まさに特筆に値する貴人との接触が記述の中心をなすもので、中・下巻が一種、感慨を伴う年末の歳事として据えるのとは異なる。

『保憲女集』「四季序」は、日常の歳事そのものを注意する点、この中・下巻に近い。しかし、随想的記述は全くない。個別の体験において語られた『蜻蛉日記』の「追儼」が、四季序においては「歳事」の一つとして概念的に掬い上げられた体なのである。「語らふ」める」の使用もまた、この記事の間接体驗化・典型化に資するであろうか。「かく」から始まる最後の一行は、四季序全体への評言である。かくして「時につけ憎からぬ世の中」の景物が挙げられたことが確認されることになる。

以上、共通素材「追儼」に即して、四季序の歳事及び暦月的構成への関心の有り様を見てきた。(但し、『保憲女集』は、閉塞された自我の苦悩を作品形成の主要動機とする点で、「四季序」よりも「総序」「恋序」においてこそ『蜻蛉日記』に極めて近いというべきであろう。「恋序」が、綴るのは、結婚生活

の中で何の主体性も持ち得ず捨てられていく「女」の悲嘆であり、「大空を紙ひとひらにとりなして書く」ことによる自尊心の回復である。総序に述べられた「女は賢き玉の臺の家刀自ともなりて」という女の有り得べき一つの姿は、『蜻蛉日記』作者とも共通する幻想であった。

「追儂」以外の共通素材については次節で検討するが、あらかじめ、両者の特徴を概括すると、当然ながら『蜻蛉日記』ではそれぞれの景物が、体験的に個別具体的に描かれる（上巻と中下巻の落差は大きい）。一方、四季序は、折々の景物を、体験性を捨象しつつも若干の随想を加えながら、四季の枠組みの中に配置し構成していく。その一般化、典型化された景物（歌材）の配列からは、古今四季歌が醸し出す観念的な季節美感とは異質の、自然・動植物・人間の「生生の理」とも言うべき生命力・生活感と、曆的枠組みそのものが浮上する。歳時記的と言われる由縁である。『枕草子』を射程に入れる時、この「四季序」に見る一般化・典型化作用は、△抽象（典型化）を経た展叙▽ともいうべき『枕草子』独特の文体を拓くものとして、重要な意味を持つのではないかと思われる。

四、類聚性と随想性 — 『枕草子』からの照射

一、二節においては、明らかに先行する散文作品について、保憲女集との関連性を窺ってみた。ここでは『枕草子』を参照

することで、四季序の文体の有り様を見ていく。引き続き両者の共通素材の側面から見ていくことにする。

【柳のまゆ】屏風絵を彷彿させる春の典型的景物に続く、「柳のまゆ」を見よう。

a 「四季序」⑤「18」野辺には白妙のけ衣着たる人ぐ、筐を引き下げて若菜摘む。柳のまゆ広げたり。

新芽の隠もる「柳の繭」が開き加減になってきた事実を指すと同時に、「柳の眉」を掛けることにより、簡潔な一節が語戲的なおかしみを内包しつつ、訪れた春の開放感を醸すことになる。漢語「柳眉」に由来するこの語は、「開」柳葉於眉中、「発」桃花於頰上」（『万葉』巻五「遊」松浦河「序」）などにも見るように、美人の眉の形容として早くから馴染みのものだが、当代までに「広げ」る意で使われた例は多くはない。叔父保胤の「縦無酔面將桃競、暫有愁眉与柳開」（『新撰朗詠』酒）のように、通常「開く」のは「愁眉」である。

これと同様の例が『蜻蛉日記』中巻にも見られる。但し道綱母の詠ではない。

b 「蜻蛉日記・中」（安和二年三月）中の十日のほどに…返し、口々したれど、忘るるほどおしはからなむ。ひとつはかくぞある。

かずかずに君かたよりて引くなれば柳のまゆもいまぞひらくる

小弓の行事に沸き立つ中、道綱母の侍女達に兼家方の侍達が返

してきた印象にも残らないような歌々の中で、道綱母が唯一記し留めたのがこの歌だったというのである。愁眉と柳眉の意識的な混線。道綱母は、それ故にこの一首に目を留めたのではなかったか。そして保憲女は『蜻蛉日記』のこの部分を意識しなかったであろうか。

さて、『枕草子』「くは」型の類聚章段。

c 「枕草子四段」 「三月三日はうらうらとのどかに照りたる。

桃の花のいま咲きはじむる、柳などをかきこそさらなれ。それもまだ繭にこもりたるはをかし。ひろごりたるはうたてぞ見ゆる。

「桃」に加え「をかき物」として「柳」を取り上げる。簡潔な描写と感覚的裁断において際立っている。他の景物を捨象する態度において、保憲女四季序②にみられるような典型化作用を経ているものと思われる。が、「柳眉を開く」との掛詞的興味には向かわず、選択した景物に専一に注意を傾け、「うたて」の感懐に及ぶまでに観察的弁別的である。抽象性の勝る類聚章段が見せる僅かな具象表現である。広がった柳の芽に対し、一方はその事実のみを記し、一方は「うたてぞ見ゆる」と寸評を加える（なお「枕草子二八二段」 「さかしらに柳の眉の広ごりて春のおもてを伏する宿かな」は、柳の葉についての随想）。

【植ゑ女】次に、先にも掲出した夏の景物の叙述を見る。

a 「四季序」⑥ 「19」 郭公の声さみだれ降るほどに、隠沼の菖蒲草をも引きあらはし、朝茅が中の蓬をもあさり出でて、

つまを定めたる植ゑ女ども、誰をこひぢに降りたるにかあらん、そぼち歌ふほどに、月日積ること……

郭公・五月雨・隠沼・五日の菖蒲と蓬に続き、「植ゑ女」が登場する。通常の歌語「田子」を女性性を鮮明にして呈示したもので、初出例。「わぎもこが赤裳ぬらしてうゑし田を刈りてをさめむ倉なしのはま」（拾遺集・雑秋、六帖、人麿集）などの影響があるうか。五日の「菖蒲・蓬」の縁語「軒の棲」から「夫」に繋ぎ、「夫が定まっているのに誰を恋うのか恋路ならぬ泥の中に降り立って」と、掛詞を駆使しつつ擲揄を込めて筆を進む。暗喩を引きずったりはしない。また、ここに見られる二つの「ほどに」は、現実の時間を示す訳ではない。これは清水好子氏の言う「など」の機能にも通じる典型化の徴表と思しく、ゆるやかに切り取った時間の中に夏の典型的景物が列挙される。新たな和歌的イメージの典型化、言語化を果たしながら、序を綴る保憲女の姿勢が明瞭に見える部分である。

確かに、これに先立つ『蜻蛉日記』にも、同様の題材を扱った長歌があった。

b 「蜻蛉日記・中」…ましてこひぢに降り立てる あまたの田子はおのが世々 いかばかりかは そほちけむ…

安和の変後の五月、排斥された源高明の室に贈った長歌の一節である。父を恋うて涙に暮れる子女の様を思い遣って詠じたもの。長歌の例に漏れず、先行和歌の世界に依拠した観念性があるが、「泥田」に降り立つ「田子」の濡れそぼつ姿が喩として

示すのは、排斥された高明の子女の悲惨であり、生の現実世界である。従って、「こひちに降り」「そぼち」の用語が対応するものの、その表現機能はaとは全く異なる。同じ『蜻蛉日記』には

b 「同 日記・下」このごろ、雲のたたずまひ静心なくて、ともすれば、田子の裳裾思ひやらるる。

のような記述もあり、初期定数歌歌人にも好まれた歌材ではある。

さて「植ゑ女」であるが、『枕草子』の随想章段の中に、

c 「枕草子二〇九段」賀茂へまゐる道に、「田植う」とて、女の、新しき折敷のやうなるものを笠に着て、いと多う立ちて歌を唄ふ。折れ伏すやうに、また何ごとするとも見えで、後さまに行く。…をかしと見ゆるほどに、郭公をいとなめううたふを聞くにぞ心憂き。

と「植ゑ女」の言葉こそ無いが、四季序と同じく田に降り立つて「唄ふ女」が取り上げられる。喩的な要素はなく、言葉のみに依る典型化を計るものでもない。実見した「後さまに行く」植ゑ女を見ての「をかし」き景物の描写である。が、それが何月何日の事であるかは示されない。更に、歌われた詞の聞き捨てならない一節に鋭く反応して、「をかし」は瞬時に「心憂し」に転じる。ここでの「ほどに」は時間的意味あいも明瞭で、aのそれよりは典型化の度合いは低い。

先に西山秀人氏は、『枕草子』随想章段から「類聚章段との

距離を見据える」べく、本段を含む五章段にわたりその自然把握の方法を考察し、和歌的な通念として「聞き置きつる」（跋文）美を確認し叙述を計る方向性と、逆に、そこから逸脱する独自の自然美の把握への方向性について具体的に論証された。興味深いのは、通念的な美を呈示することにより、（逆説的に）清新な美の発見が読者に了解されたのであろう、とする見解である。両方向の混在こそが随想章段の方法的特色だ、とするのである。

「植ゑ女」は確かに古今的な歌材ではない。が、清少納言が「聞き置きつる」景物ではあったのではないか。初期定数歌の蓄積が「和歌的な通念」に組み込まれても不思議ではない時期に来ていた。実見により、「植ゑ女」は「動」の美として確認され、古今的通念に背く「郭公」の歌詞が糾弾された。

日常卑近な景物・歌材への関心は三者共通に見られながら、このようにその表現には明確な位相差が見てとれる。『枕草子』随想章段の文体が生まれるについては、『蜻蛉日記』が持つような個別具体の体験性を一旦捨象し、抽象化典型化を図るようなある「媒体」が必要だったのではなからうか。従来から、『枕草子』（類聚章段）成立の前提として、「歌枕の観念連合」「歌枕名寄の類（地名類聚）」が想定され、具体的な先行作品として『古今和歌六帖』『十列』『和名類聚抄』『雑纂』等が挙げられてきた²⁰。が、類聚章段から随想章段への展開を念頭に置きつつ、その先蹤を同時代の和歌作品に辿るとき、保憲女「四季序」

が景物を季寄せ的に一年の枠に纏め、加えてそこに言語遊技的ながら多少の感懐を折り込む散文を綴っている事実は、もっと重視されているのではなからうか。『枕草子』への「二媒材」として保憲女集を措定してみたい。同時代性と括つてもよい。

さて、田中新一氏は、「清少納言の『四季』意識」と題する御論において、『枕草子』の一元的暦月意識を余すところなく論じられた。即ち、『古今集』の暦月・節月意識による二元的四季観との違いを判別し、四季均等の扱い、夏冬の相対的比重の上昇と対照的表現、その極における絶対的美観の希求などの特徴を指摘されたのである。この四季観は、基本的に初期百首の傾向と軌を一にするものである。清少納言の父元輔は、初期定数歌人達のやや前を行く歌人ではあったが、河原院に集つた一人であり、新傾向の歌を享受しうる位置にいた。そしてまた保憲女も、父あるいは伯父保胤・保章らを通じて間接的にであれ、同一文化圏に関わったと考えられる。以下『保憲女集』と『枕草子』に限って、両者の関係を更に検討したい(『枕草子大事典』に記したところと重なる部分があることをお断りしたい)。

先ず、初期百首において歌材が飛躍的に充実する夏・冬の場合面を取り上げる。

【夏の極】夏の暑さは、その極みに於いて捉えられる。

a 「四季序」⑥「19」月日積ること、おほぬさになりゆくは、流るゝ水にたぐへ、風にまかせて涼み、ひねもずに鳴く空蟬

の露を待つ命、心細く、暮らしかねたる夕闇に、飛びわたるたる蛍の光、小雄鹿は照射の光に驚く。水に宿れる影を魚は怖ぶ。ともす夏の水の飾りに、大殿の灯火は消えぬ。照る日にも消えぬ氷をも、ひみづといひて、暑し暑しといふほどに、……

* 「保憲女集」65 手慣るれど猶火鼠のかはほりは暑さぞまさるおきやしてまし

c 「枕草子一八五段」いみじう暑き昼なかに、いかなるわざをせむと、扇の風もぬるし。氷水に手をひたし、もてさわぐほどに、こちたう赤き薄様を唐なでしこのいみじう咲きたるに結び付けて取り入れたるこそ、書きつらんほどの暑さ、心ざしの程浅からずおしはかれて、且つ使ひつるだにあかずおほゆる扇もうち置かれぬれ。

a は、「蟬」から「蛍」「照射」「篝火」と、多く初期百首の応和の素材として歌題化しつつあった夏の景物を、多少の説明的言辞とともに次々に繰り出して定位する。次いで「氷水(ひみづ)」が挙げられるが、例によって「四季序」は、「照る日に消えぬ氷水」と五行の火・水を折り込みながら言語矛盾を衝き、「土佐日記」風の諧謔を見せる。「扇」もまた、皮膚感覚に敏感な初期百首の夏の特徴的歌材で、通常「ぬるさ」が詠まれる。注目されるのは、『枕草子』が「こちたう赤き」薄様と撫子の「いみじう咲きたる」を組み合わせ、夏(五行では色は赤)の極を示そうとしていることである。これは、保憲女歌65の「火

鼠のかはほり」扇による夏（五行の火）の極の表現に対応する発想ではなからうか。『保憲女集』の奇矯な歌は、△火鼠のかはほり扇Vにより示される「暑さ」の極みにおいて、手慣れた扇を「置く」しかないというおかしみによって、『枕草子』のこの段を導いたと言つては言い過ぎであろうか。絶えず新奇を求める姿勢は、初期待数歌あるいは曆的発想に沿いつつ詠じる保憲女に、既に顕著なのである。

【冬の極】同様に、嚴冬の寒さもその極みに於いて捉えられる。

a 「保憲女集」（異本118）冬の夜は板間より洩るひさ方の影さへこほる心ちこそすれ

先ず、上句が示す「荒れたる宿の板間から洩れてくる月光」への嗜好は、『枕草子』の以下の段にも見られるもの。

c 「枕草子・一本二十六」またさやうの荒れたる板間より洩りくる月。…いつも、すべて池あるところはあはれにをかし。冬も氷したる朝などはいふべきにもあらず。わざとつくるひたるよりも、うち捨てて水草がちに荒れ、青みたる絶え間より月影ばかりは白白とうつりて見えたるなどよ。すべて、月影はいかなるところにてもあはれなり。

同段後半、青い水草の絶え間に映る月光への注目、四季序の次の部分に通じる。

a 「四季序」⑥「19」わたつみに降る雪の間のごと、はちすの間より僅かなる影 見ゆる月のごと、飽かず見ゆるほどに：

（武田氏本文「…雪の間のごとはり、木の間より…」）

『枕草子』に見られる冬の月の冷澄美への関心については、田中氏が、次の元輔の歌二首を挙げて論じるところである。²⁶

冬の夜の池の水のさやけきは月の光のみがくなりけり

（拾遺集・冬・二四〇）

いざかくて居り明かしてむ冬の月春の花にも劣らざりけり

（同・雑秋・一一四六）

氏は、清少納言の「夏季美・冬季美への思い入れ」が、「春秋二季重視の伝統的四季観の世の中にあつて、清原家に流れる傾向」であることを強調し、これを「彼女の四季均等観を確立させた原動力」と見なされた。が、元輔の歌に限らず、応和二年河原院歌合題に「月影漏屋」があり、『古今六帖』一に分類題「冬の月」が置かれ、そこでは貫之以来の冷澄美を逆倒的要素を加えながら詠じる「大空の月の光し寒ければ影見し水ぞまづこほりける」、「天の原空さへ冴えやわたるらん氷と見ゆる冬のよの月」などが取りあげられてもいた。また、四季均等観は、河原院歌人たちが曆的觀念に拠る定数歌の中で明確に打ち出したものであり、保憲女もまたその外縁にあつた。このような、保憲女歌をも含む新たな四季意識の展開の中で、清少納言の清新な自然描写も育まれてあつたものと思しい。

最後に『保憲女集』四季序を、『枕草子』冒頭三段と対照しつつ見ておきたい。これを『枕草子』の作品構造の枠組みを示す根幹部分と捉えるならば、四季序との関わりにおいても最も重要な部分である。

初段は、周知の「春は曙……」に始まる四季の美の叙述である。季と時刻に切り取られ、描かれるのは主として「天空」の様である。上野理氏²⁷は、特異な「この段をなぜ書いたか」と自問し、結論は保留しつつも、この部分が天象（日月雲雨風霜雪）と歳時（春夏秋冬朝昼夕夜）にかかわる言葉によって過半を占められている事実を指摘している。彼此の類書や辞書の傾向に類するものとして、それ以上踏み込んではいないものの、この指摘は注意される。続く第二段では、月名を列挙しつつその「をかし」さと言う。四時は対等に扱われ春秋の偏重はない。第三段は、元日の節会以下、七日の若菜摘み、白馬の節、八日の女叙位、十五日の望粥の節供等々、圧倒的に正月の行事にスペースを割きながら、三月三日の節、四月賀茂祭の記述で終わる。年中行事が際やかに描かれる。以上の三段を通じて、「立春」に始まる古今的な節月構成は見られない。

日向一雅氏²⁸は、この『枕草子』冒頭三段に、一条天皇賛仰の政教的意図を読み、『枕草子』に働く方法としての「天象と歳時の調和した『陰陽の變理』」に言及している。初段の「紫だちたる雲」を聖代観の暗喩と見、さらに上野氏指摘の天象・歳時の用語の当段における多用を、この「陰陽の變理」の形象の故とする。氏は「職員令」を挙げて聖代観との関わりを説明するが、そもそもは「易経」に発するものと見て良からう。

すでに触れてきたように『保憲女集』の構成や和歌の個々の表現にも、陰陽に基づく曆的発想は集の論理としてさまざまに

働いている。たとえば、

a 「四季序」①「14」憂きことはみな忘れ草茂れり、嬉しきことはつきせぬ葦原に鶴下りみ、年を積める舟、千々の帆を下ろす泊、かひある海に騒しき波なく、「天空に暗れたる雲なく、霞たなびきわたり、「地」木草も心をとなへ、鳥虫も声々さへづれば、「人」人も喜びをなし、盛りとする春ののどけさ、池のほとり花のあひだと心のほどさはらかに、……

c 「枕草子第三段」「天」正月一日は まいて空のけしきもうらうらと、めづらしう霞みこめたるに、「人」世にありとある人は、みな姿かたち心ことにつくろひ、君をもわれをも祝ひなどしたるさま、ことにをかし。「地」七日、雪間の若菜摘み。青やかにて、例はさしもさるもの、目近からぬ所に、もてさわぎたるこそをかしけれ。

右の例が、同じ曆的意識・政教的意味をもつことは、自明であろう。日向氏は、同三段を、『源氏物語』初音巻についての「此段を三に分て天地人の三才とみるべし」という『岷江入楚』を援用しながら解されるが、ここに適用された「天地人の三才」の記述は、『保憲女集』四季序にこそより典型的に当てはまる。「内に、天地人と分けて記した通りで、原型とも言うべき描き方なのである。そして、これも本はと言えば、『周易』「繫辭下伝」に「易之為書也、廣大悉備。有天道焉、有人道焉、有地道焉。兼三材而兩之。故六。六者非它也、三材之道也」と記さ

れるように、陰陽の基本的観念に即したものである。『枕草子』について言われ、『源氏物語』について言われる程度には、『保憲女集』の和歌序に示されているこの事実は、注意されていないのではないだろうか。

「四季序」は、天地人の運びが明瞭であるが、これ以上の展開はない。一方『枕草子』は、類聚章段から随想章段へ、さらに日記章段へと「人」への関心を深め、主家賛美の象徴として「春」の表現機能がフルに発揮されるようなことにもなる。

五、『保憲女集』四季序の位相

このように『保憲女集』四季序を表現の実際に即して見ると、『土佐日記』からは時にその特殊な諧謔性をも受容しつつ、仮名散文を綴るそもその視座の置き方と文体を学んだものと思われる。また一方『蜻蛉日記』中下巻からは、歌序による自照表現の方法のみならず、自らの和歌世界を暦月的な時間構成の形で展開し、日常的歳事で埋める契機を得ていた可能性が窺われる。もちろんその根底には、毎月集を始めとする初期定数歌が育んだ暦月的時間意識があり、それゆえにこそ暦の家、賀茂氏の女としての矜持を保つべく、定数歌の序に倣う形で散文を綴ろうとしたのであろうが。

そして、新しい和歌素材(広義歌枕)を名寄せ的に綴りつつ、それに留まらない感懐の叙述へと長大な「序文」が生まれるよ

うな和歌的状况の中でこそ、『枕草子』は成立し得たと思しい。四季序を、抽象から展叙への媒体的位置にあるものと措定して、『枕草子』との同時代性について窺ってみたことになろうか。以上、素描に止まる。

注

- (1) 武田早苗『賀茂保憲女集』(和歌文学大系20 明治書院 二〇〇〇△平12V三)
- (2) 拙稿「和泉式部の詠歌環境 — その始発期 —」(『国文学研究』71 一九八〇△昭55V・六)
- (3) 守屋省吾『蜻蛉日記形成論』(笠間書院 一九七五△昭50V・九)
- (4) 拙稿「賀茂保憲女集試論 — 初期百首と暦的観念 —」(『文学・語学』147 一九九五△平7V・八)
- (5) 岡一男『古典の再評価』(有精堂 一九六八△昭43V・六)
- (6) 松平盟子『賀茂保憲女集』の研究 — 痲瘡罹病年代と序文について — (『南山国文論集』2 一九七七△昭52V・一一)
- (7) 拙稿「初期百首と私家集 — 好忠百首を中心に —」(『王朝私家集の成立と展開』一九九二△平4V・一一)
- (8) 拙稿「賀茂保憲女集の形成試論 — 序と和歌の対応が示すもの —」(『白梅学園短期大学紀要』32 一九九六△平8V・

- (9) 拙稿「初期百首の神祇意識——好忠百首を起点に——」『白梅学園短期大学紀要』30 一九九四△平6V・三三
- (10) 蔵中スミ「曾丹集あれこれ(二)——当代歌謡との交渉」『水門』6 一九六五△昭40V・二二
- (11) 大岡信『紀貫之』日本の詩人選(筑摩書房 一九七二△昭47V)
- (12) 三田村雅子『賀茂保憲女集』の位相——鳥の表象・歌から序へ——『和歌文学新論』明治書院 昭和57)
- (13) 拙稿(注4)に同じ。
- (14) 今西祐一郎『蜻蛉日記覚書』(岩波書店 二〇〇七△平19V・三)岩波講座『日本文学史』第二卷 一九九六△平10V)
- (15) 大谷雅夫『蜻蛉日記』と漢文学(岩波書店『文学』二〇〇七△平19V・一一、一二)
- (16) 古賀典子「蜻蛉日記下巻の問題点に就いて——天延元年冬の記事を中心に——」『国語と国文学』四九卷六号 一九七二△昭47V・六)
- (17) 岡一男「賀茂保憲女とその作品」『国文学研究』一九五〇年△昭25V・一月)
- (18) 清水好子「典型創造の意図——枕草子の文体・敬語——」『解釈と鑑賞』一九六四△昭39V・十二)
- (19) 西山秀人「枕草子随想章段の一考察——自然把握の方法——」
- (20) 『語文』78輯一九九〇・一)
- (21) 池田亀鑑「美論としての枕草子——原点批評の二つの試み——」『国語と国文学』一九三〇△昭55V・一〇)↓『研究枕草子』一九六三)
- (22) 田中新一「清少納言の『四季』意識」『源氏物語と源氏以前——研究と資料——』(武蔵野書院 一九九五△平6V・『平安朝文学に見る二元的四季観』風間書房一九九〇・四)
- (23) 安法法師集七七・八二、惠慶集一七七等。
- (24) 犬養廉「河原院歌人達——安法法師を軸として——」『国語と国文学』一九六七△昭42V・一〇)
- (25) 『枕草子大事典』項目(枕草子研究会編 二〇〇一△平13V・三)
- (26) 川村晃生「歌人達の夏——暑気と冷氣と——」『芸文研究』55 一九八九△平1V・三)↓『撰関期和歌史の研究』一九九二)
- (27) 田中(注21)に同じ。
- (28) 上野理『枕草子入門』(有斐閣新書 一九八〇・二)
- (29) 日向一雅「枕草子の聖代観の方法——『陰陽の變理』の観念を媒介にして——」『国語と国文学』一九九三△平5V・九)
- (30) 三田村雅子『枕草子 表現の論理』(有精堂 一九九五△平7V・二)

くはき としこ (日本文学)

Toshiko KUBOKI : A Topological Study on the Style of Introduction to "KAMO
Yasunori no Musume Shu"